

Title	«Poema de Mio Cid»(試訳)(2)
Author(s)	中岡, 省治
Citation	大阪外国語大学学報. 33 p.171-p.191
Issue Date	1975-01-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80548">https://hdl.handle.net/11094/80548</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 《Poema de Mio Cid》(試訳)(2)

中 岡 省 治

### Poema de Mio Cid - ensayo de traducción

Shoji Nakaoka

A continuación aparece una modesta traducción del “Poema de Mio Cid”, compilado hacia 1140 y conservado hasta el presente en un manuscrito del principio del siglo XIV. En él el poeta canta las glorias del Cid, héroe de la Reconquista, en una forma vigorosa y fina, rítmica y vívida, así en su lenguaje como en su estilo, cuya fiel reproducción en japonés ha sido una tarea inaccesible para este traductor de pocos alcances, pero el haber podido meter mano a su traducción es algo que le satisface.

以下に、不十分ながら《Poema de Mio Cid》の翻訳を試みた。1140年頃に編まれ、14世紀初頭の写本で現在に伝えられるこの叙事詩は国土回復の戦いの雄、エル・シッドを歌い、讃えた一大ロマンである。この叙事詩は、Ramón Menéndez Pidal の校訂本によれば3731行にも及ぶが、ここでは行数番号 506 から 942 まで、即ち25連から53連までを訳出したにすぎない。加えて、原文特有の力強さ、雰囲気をも忠実に訳文に写し出せたかどうかとの点でも、訳者自身はなほ疑問でもある。

なおテキストには、Poema de Mio Cid, edición, introducción y notas de Ramón Menéndez Pidal, Clásicos Castellanos, No. 24, Madrid, 1966 を用い、その他、特に、Poema de Mio Cid, Edición Paleográfica por Don Ramón Menéndez Pidal, Madrid, 1961, Obras de Ramón Menéndez Pidal, Tomo IV, Vol. I, Madrid, 1954 をも適時参照した。

(25)

(エル・シッド彼が受くべき五分の一の戦利品の品々をモロー人に売る一彼の仕えるアルフォンソ王と戦を交えることを望まず)

506 獲得せし戦利品その場に堆高く積まれたり。

よき時に帯佩せしエル・シッド思いに耽りぬ。

アルフォンソ王のこと、王の兵士達がこの地に迄来たらんかと、

又、手勢を率い、再びシッドに災をもたらすにやあらむと。

510 シッドは直ちに戦利品の分配を遺漏なく行ない、

各人への分与を書き物にて夫々に手渡すよう分配官<sup>1)</sup>たちに命ず。

部下の騎士達皆その幸運を喜べり。

騎士にはそれぞれ銀百マルコ

徒歩の兵にはその半ばを直ちに与えられぬ。

515 ミオ・シッドには戦利品の品の五分の一のみ<sup>2)</sup>残る。

この戦利品を売ること、また余人に贈ることも能わず。

彼の陣中に男女の捕虜を拉致することをも望まぬエル・シッド、

カステホーンの人々と交渉し、フィータやグェダラフェーラに使者を送り、

この五分の一の戦利品、如何程に買取るや計らしむ。

520 たとえモーロ人の建てし価の僅かにして彼等の得る所多からんとも

それはシッド一行の運命なり。

モーロ人はその捕獲品を銀三千マルコに見積れば、

ミオ・シッドこの申し出を喜んで受け入れぬ。

かくして三日目に三千マルコしかと支払われたり。

さて、ミオ・シッド部下の者と語らいて

525 その城中には住家とすべき場もなく、城を抑え守らんにも、

いずれは水を欠くこと必条と結論す。

シッド、「モーロ人は平穩に恭順したる身、既にこの旨の取り決めも交わされたり<sup>3)</sup>。

アルフォンソ王手勢を率いてわれらを撃たんともかぎらず、

今こそカステホーンを出ずる時ぞ、一同、ミナーヤよわが言を聞け！」と言う。

(26)

(エル・シッド、バレンシアのモーロ人大守に従うサラゴースの地を目指して行く)

530 シッド続けて言う。「わが言わんとするところ、皆の者曲解することなかれ。

われらもはやカステホンに留まること能わず。

アルフォンソ王近くにありて、われらを追い来たらん。

されど、このカステホーンの城を荒すこと、われらが本意ならず。

男女夫々百人のモーロ人をここにて解き放たん、

- 535 モーロ人より金品を奪いたること悪し様に思われんことを避くるがためなり。  
皆のもの、汝ら戦利品を受け、今や貧に窮する者なし。  
明朝、日の出と共に馬駆りて出立せん。  
わが君主アルフォンソ王との交刃は避けたきもの」  
エル・シッドの言葉を一同快く受け容れ、
- 540 その落せし城より、皆満足して出発す。  
モーロ人は男も女もエル・シッドを祝福して止まず。  
一行能う限り歩を速めフェナーレス川を遡り、  
アルカーリアス<sup>4)</sup>の地を越え、更に彼方へと行進す。  
クエーバス・デ・アンキータ<sup>5)</sup>を通過し、
- 545 タフニールア川を渡り、タラーンツ<sup>6)</sup>の平原に入り、  
更にその平原の奥深く歩を速め行く。  
ファリーサとセティーナ<sup>7)</sup>との狭間にミオ・シッド一夜を明かさんとす。  
エル・シッドその途次、又多大の戦利の品々を手中にす。  
この一行の真意をモーロ人たちが計りかねたり。
- 550 翌日ビバール生れのミオ・シッド再び行を進め、  
アルファーマ<sup>8)</sup>に至り、ラ・フォス<sup>8)</sup>の谷を下り、  
ブォビエールカ<sup>9)</sup>へ、そのかなたのテーク<sup>9)</sup>にまでも馬を駆りし後、  
アルコセール<sup>10)</sup>の近くに陣屋を張らんとす、  
円形、要害の地、且又難攻の丘の上に。
- 555 この地は周囲をサローン川がめぐり、水を断たるる恐れなき要害の場所なり。  
ミオ・シッド、ドン・ロドリゴ、アルコセールを落さんと計る。

(27)

(エル・シッド、アルコセールに臨みて陣営を置く)

- エル・シッド油断なくこの丘に兵を配し、陣営を構えたり。  
兵士の一部は山側をかため、他の者たちは川に向いて立つ。
- 560 よき時に帯佩せしこの心正しき勇者は丘の周囲に、又川に近く  
空堀を掘るべく家来たちに命を下しぬ。  
敵の奇襲を受けることのなきよう、  
又、ミオ・シッドがその地に陣営を構えしことを示威せんがためにも。

(モーロ人のおののき)

- 諸所に伝令飛び散りて、  
 565 その地に戦士ミオ・シッドが本陣を置きたること、  
 又キリスト教徒の地を出で、モーロ人の国に侵入したること、  
 彼らの陣屋の近くにはモーロ人誰一人として畑を耕し得ぬことを伝えたり。  
 ミオ・シッド、部下共々欣喜雀躍、  
 アルコセールの城も今や貢物を収め臣下の礼をつくさんとす。

(エル・シッド策をめぐらしアルコセールを落城させる)

- 570 今やアルコセールのモーロ人、ミオ・シッドに貢物を献じ、臣下の礼をとる。  
 テーカ村の民もテレール村<sup>11)</sup>のモーロ人も亦然り。  
 されど、カラタユード<sup>12)</sup>の者にはかかること真に不本意に思えたり。  
 この地にミオ・シッド十五週も滞在す。  
 ミオ・シッド、アルコセールが未だ降伏せざるを見て、  
 575 計略をめぐらし、即刻実行に移す。  
 陣屋ただひとつを残し、他の陣屋を取りはらい  
 サローン川<sup>13)</sup>を下手に、軍旗を靡かせ遠ざかり行く。  
 兵士皆、甲冑に身をかため、太刀を佩き、  
 警戒これおこたらず、アルコセールの者達をおびき出さんと計る。  
 580 これを見しアルコセールの者ども、喜びたることこの上もなし！  
 「ミオ・シッドにはパンも兵糧もつきたるべし。  
 陣屋も持ちかねたり、一張天幕を放置したるが何よりの証拠。  
 シッド、追手を逃るかの如く立ち去り行くぞ。  
 あれに追打をかけ、戦利の品々を奪い取れ。  
 585 テレール村の者どもに先を越されまいぞ。  
 585 b かくいうも、彼らシッドを捕えなば、われらには何の分与もすまい。  
 われらより略奪せし貢物をシッドより二倍して取り戻さん。」  
 皆、先を争いてアルコセールを出たり。

- ミオ・シッドそれを見計いつつ、逃れ行く様を装いぬ。  
サローン川に沿い、部下を率い、下流へと逃れ行く。
- 590 アルコセールの城の者、口々に「ああ、獲物が遁走す！」と叫び、  
大人も子供も城郭の外に飛び出したり。  
シッドを捕えんとするあまり、考え他には及ばず、  
城門は開かれたるまま、これを守る者もなし。  
かの目聡き戦士のエル・シッド、この時はたと向き直り、
- 595 アルコセールの者たちとその城との距離の大なるをよみとり、  
旗印を転じさせ、力の限り馬を駆り城に向いて突進す。  
「いざ騎士たち、きゃつらを刃の餌食とせよ。一同ひるむなかれ！  
神の御加護の下にあるわれら、獲物は既にわれらの手中にあり！」  
かくして、エル・シッドの軍勢平原の中央にて敵と刃を交じえたり。
- 600 ああ神よ！ この朝の歓喜の何と大なることよ！  
ミオ・シッドとアルバール・ファーニェスその軍勢の先頭を疾駆す。  
この二人の武者の跨りたる駿馬、兩人の意のままに走り、  
たちまちこの二人、モーロ人と城との間に割り込んだり。  
ミオ・シッドの軍勢容赦なく、モーロ人を襲い、
- 605 瞬時に三百人をも誅したり。  
秘かに潜みし一隊は大喚声を上げ、  
先陣の一隊にその場を任せ、城に向う。  
抜刀を手に手に、城門にまで行きその場を固めたり。  
たちまち味方到着す、既に勝利を手中にしたる軍勢が。
- 610 御承知下され皆々さま、かくしてミオ・シッド、アルコセールの城を陥せしを。

(30)

(アルコセールの城に翻翻とエル・シッドの旗印ひるがえる)

- ペール・ベルムードス<sup>14)</sup>も来たる、手には旗印をしっかりと握り、  
城の高みに天にとどけとばかりそれをかかげたり。  
よき時に生れしかのシッド、ルイ・ディアス言う。  
「天なる神よ、その膝下におわす全ての聖人よ、われ深き感謝をささぐ。  
615 ご加護をうけ今や、騎士たちにも、駿馬にもよき臥し所をしつらえん。」

(エル・シッドのモーロ人への寛大なる行為)

- 「アルバール・ファーニェスよ、また騎士達よ、わが言葉を聞け！  
 この城にてわれら大なる戦果を収めたり。  
 モーロ人は死して倒れ、生命あるもの僅かばかり。  
 されど、われらはモーロ人の男とその女どもをも売ることあたわず、  
 620 その首を刎ねるも何ら益なし。  
 モーロ人を城内に容れようぞ、もはやこの地の主はわれらにして、  
 モーロ人の家に住み、彼らを従僕となさん。

(バレンシアの王、アルコセールを奪回せんと望み、エル・シッドを撃たんとて軍勢を送る)

- ミオ・シッドかかる戦利の品々に囲まれ、アルコセールに留まれり。  
 城外にひとつ残せし天幕を取払わんがため部下を遣る。  
 625 テーカのモーロ人には、この負け戦甚しき恥辱となり、テレールの者にも、  
 カラタユードの者にも大いなる不面目に思えたり。  
 かくて、モーロ人語らいてバレンシアの王に使者を送り、  
 「ミオ・シッド、ビバール生れのロィ・ディアスなる者、  
 アルフォンソ王の逆鱗にふれ、その領国を追われ、  
 630 アルコセール近く of 堅固なる地に陣屋を張り、  
 この町の人々を巧みに城外に誘い出し、ついに城を陥したり。  
 もしわれらに貴侯の援助なくば、貴侯も亦テカをもテレールをも失なうべし。  
 カラタユードの命運も同じこと、逃れるすべもなし。  
 サローン川畔の地も必らずやエル・シッドの手中に陥るべし。  
 635 その彼方、シローカ川<sup>15)</sup>畔もまた同様ならん」と伝えたり。  
 この報告受けしバレンシアのタミーン王<sup>16)</sup>痛く落膽し、  
 「わが許に三人のモーロ人大守伺候し今ここに在り、  
 内二人今すぐ、彼の地目指し出立せよ。  
 三千人の武装せるモーロ人を引連れて行け。  
 640 汝ら兩名に援助せん、かの国境いの者どもと力を合わせ、

あのシッドを生きたるまま捕え、わが目前に引き据えよ。

わが領国を犯せしうえは、必らずやそれ相応の報を受くるものと知らしむべし」と言えり。

三千人のモーロ人、馬に跨り出立す。

この一隊夜陰にセゴールベ<sup>17)</sup>に至り、ここに一夜を明かす。

645 翌朝、再び馬を進め、

夜セルフア<sup>18)</sup>に到り、そのまま朝を待つ。

この軍勢より国境いに使いを送れば、たちまち四方より、モーロ人寄り来たる。

かくてモーロ人の大軍、別名カナールと呼ばれしセルフアの地を出で、

650 四六時中歩み続け、片時たりとも休むことなし。

その夜カラタユードに至り、その地に夜営す。

そのあたりくまなく伝令をつかわしたれば、

これを聞き伝えし無数のモーロ人達、

ファーリスとガルベ<sup>19)</sup>と称す二人のモーロ人大守の許に集まり来たる。

655 いまや、アルコセールに陣をかまえしかの礼節高きミオ・シッドを包囲せんとす。

(33)

(ファーリスとガルベ、アルコセールのエル・シッドを包囲す)

モーロ人の軍勢陣営を張り、野営地を構えゆけば、

近隣にモーロ人数限りなく居るが故、その数、日毎に増したり。

モーロ軍の送りし物見の兵は、

昼も夜も武装かたく、その辺りを徘徊し、

660 この物見の兵や数多く、今やモーロ人厩大なる軍勢となりぬ。

時は今やとモーロ人、シッドの軍勢に水攻めをかけたり。

ミオ・シッドの手の者たち、城外に出で、一戦を交えんとすれど、

よき時に生を享けしシッド、これを堅くいましめたり。

かくして、まる三週間もの間、この包囲解けることなし。

(34)

(エル・シッドのその家来への助言—ひそかなる戦いの準備—エル・シッド、ファーリスとガルベに対し野戦を仕掛けんがため打ちいでぬ—ペドロ・ベルムーデスが初太刀を敵に見舞う—)



- 665 三週間がすぎ、正に四週目に入らんとする時、  
エル・シッドその家来たちを召して、その存意を聴かんとて、言う。  
「われら既に水は断たれ、程なくパンも底をつくべし。  
もしわれら夜陰に乗り、この地を去らんとすれば、それも阻止されよう、  
一戦を交えんとすれど、彼方は余りにも多勢なり。
- 670 騎士たちよ、われに教えよ、如何にすべきかを」  
まず初めに、かの忠節の武士ミナーヤ、かく言う。  
「なつかしきカステーリアの地よりわれらこの地にまで到る。  
もしモーロ人と戦わずば、われらパンを手中にすることもならず。  
われら総勢六百騎、いやこれより更に多からん。
- 675 神の御心はただひとつ、神の御名にかけて、  
明日はあのモーロ人どもに戦を挑まん」  
勇者エル・シッド、これをききて、「よくぞ申したり。  
汝の雄々しき言葉は、汝の名誉を更に高めんものぞ」と言う。  
ここでエル・シッド、男女を問わずモーロ人すべてを城外に追い払いぬ。
- 680 これは彼らの密議を耳に入れざらんがためなり。  
騎士たち、日夜を分たず合戦の準備を行なう。  
翌朝、日の出を機として、  
ミオ・シッド、その部下の武士たちと同じく、武具甲冑に身をかため、  
かく言えり。その言葉を皆様方、聞かれよ。
- 685 「皆の者、城外に出で戦わん、一兵たりとも残るべからず。  
ただ旗守りの二人は、残りて城門を守れ。  
もしわれら戦場で死なば、われらを城中に運び入れよ。  
もしわれら戦に勝利を収めなば、戦果はなお大きからん。  
パール・ベルムードス、汝、われらが旗印を持て、  
こよなく忠誠心厚き汝、この旗印をその身と置いて守られよ。
- 690 ただ、われ汝に命を下すまでは、その旗印を推し進めることなかれ」  
パール・ベルムードス、シッドの手に口づけし、旗印を受けとりぬ。  
エル・シッドの手の者、城門を開き、揃って城外に姿を現わしぬ。  
モーロの物見これを見て、本陣へと急拠とって返す。
- 695 モーロ人の軍勢の動きのす早きこと、武器をとり隊伍を整うその敏捷さよ！  
軍大鼓<sup>20)</sup>の大音響を受け、地面も裂けんばかりなり。  
皆々さま、モーロ人が武器をとり、立ち向う様の速きことご覧あれ。  
モーロ人の軍勢には、二本の旗印ひときわ高く翻えり、

その他、小さき旗印幾百本、誰かその数を数えようか。  
700 モーロ軍の先兵今や前進を始め、  
ミオ・シッドとその麾下の兵士を弄せんとす。  
「皆の者、守りを堅くし、一步たりともこの地を動くな。  
わが命令の下るまでは、隊伍より単身の抜け駆けは慎め」とはシッドの言。  
かのパール・ベルムードス、そのはやる心を圧え切れず、  
705 手に軍旗をしっかりと握り、馬に拍車をかけ敵陣に向わんとし、言う。  
「忠誠の士、シッド様、御身に神の加護のあらんことを！  
われこれより、あのモーロの大軍のただ中に、あなた様の旗印を打ち込まん。  
この旗印を守るべきおのおの方、その働らきの程を見せられよ！」  
勇者、エル・シッド、「逸るべからず、落着け！」というも、  
710 パール・ベルムードス、「他にいかなる手だてやあらん」と叫び  
馬に鞭打ち、その愛馬をモーロの本隊に乗入れたり。  
モーロ人その旗印を奪わんと、パール・ベルムードスをうち迎え、  
彼に太刀をあびせかけるも、彼、微動だにもせず。  
勇者エル・シッド、「皆の者、彼の援護を！」と命令す。

(35)

(エル・シッドの手の者、ペドロ・ベルムードスを助けんとて、攻撃を始める)

715 胸許には楯をしっかりと抱え、  
紋所を付せし槍を低くかまえ、  
鞍畔の上に、その身を伏し、  
エル・シッドの手の者、敢然と敵を誅さんで行く。<sup>21)</sup>  
よき時に生を享けし人エル・シッドは大音声に叫ぶ。  
720 「皆の者、神のご加護を祈念し、モーロ人を撃て！  
われはロイ・デイアス、ビバール生れのエル・シッド、その名も高き戦士なり！」  
シッドの軍勢、パール・ベルムードスの馬乗入れし敵陣めがけて攻め入りぬ。  
その数、槍三百、これすべて紋所を付せしもの、  
この三百の槍兵、てんでに槍を打ち振り、三百人のモーロ人を血祭りにあげ、  
725 戻りの突きにて、また新たに三百のモーロ人を打ち倒したり。

(36)

(エル・シッドの軍勢 敵軍を敗退さす)

皆々様ご覧召されよ！

無数の槍が宙に舞い、地に降るを、

刀をうけ、皮の盾がくだけ裂くるを、

鋼の鎧が破れ、鎖かたびらの千切れるを、

数知れぬ白き旗印が血に赤く染まるを、

又数知れぬ主なき駿馬の馳け行くを。

730 モーロ人はマホメットの名を、キリスト教徒は聖ヤコブの御名を大音声で唱えぬ。<sup>22)</sup>

この戦場に、しばしの内に

千三百余人のモーロ人、倒れ横たわりぬ。

(37)

(この戦に参画せるキリスト教徒の騎士大将の面々)

金覆輪の鞍に身をおき雄々しく戦いたる、

偉大なる戦士、ミオ・シッド、ルイ・ディアス。

735 その膝下、ミナーヤ・アルバール・ファーニェス<sup>23)</sup>、ソオリータの領主、

マルティーン・アントリーネス、かの家柄高きブルゴスの騎士、

ムーニョ・グスティエーロス<sup>24)</sup>、かつてはエル・シッドの近習なりし騎士、

モンテ・マイヨールを治むる人、マルティーン・ムーニョス<sup>25)</sup>、

アルバール・アルバーロスとアルバール・サルバドレーズ<sup>26)</sup>、

740 ガリーン・ガルシーアス<sup>27)</sup>、節操高きアラゴンの人、

エル・シッドの甥、フェーレス・ムーニョス<sup>28)</sup>、みな何と果敢に戦いしことよ！

またエル・シッドの軍勢たる他の騎士たちも、

軍旗を死守し、その主君エル・シッドを固く守りたり。

(38)

(ミナーヤの危機—エル・シッド、大守ファーリスを討つ)

モーロ人 ミナーヤ・アルバール・ファーニェスの乗れる馬を攻め、殺す。

745 これを見しキリスト教徒の軍勢、直ちにミナーヤを守らんとて駆けつけぬ。

- その槍おれしミナーヤ、刀を手に、  
徒歩ながらも、敵に大いなる打撃を加えつつあり。  
カスティーリアに生を受けしミオ・シッド、この様を見、  
駿馬に跨りたるモーロ人の侍大将を襲い、  
750 右手の太刀にて、切りかかり、  
胴を真二つにし、一塊を地に投げ落したり。  
エル・シッドその馬をミナーヤに引渡しつつ言う。  
「いざ、これに乗れ、わが右腕ともたのむ武士、ミナーヤよ！  
今日こそ、われ汝の助けを求むる日。  
755 モーロ人の陣堅固にして、いまだ戦場より去る気配もなし。  
彼らの殲滅こそまずわれらの急務なり」  
ミナーヤ太刀を手に、その馬にまたがり、  
敵のまったく中に激しく切り込み、  
刃のとどく限り、モーロ人を次々と倒しぬ。  
好時に生を受けしミオ・シッド、ロイ・ディアスは  
760 モーロの大守ファーリスに三太刀あびせしが、  
二太刀は外れ、一太刀この大守を捕えたり。  
鎧をつたひ鮮血流れ落つ。  
かくてこの大守馬首を返し、戦場より逃れんとす。  
エル・シッドのこの一太刀にモーロ人の軍勢崩れたり。

(39)

(ガルベ傷つき、モーロ人敗走する)

- 765 マルティーン・アントリーネス、ガルベに一太刀あびせたり。  
ガルベの兜のルビー玉 あたりにとび散りぬ。  
この一太刀は兜を真二つにせしのみか、額にまでも傷つけたれば、  
大守再び相手の太刀に立ち向うこともなく  
ここに破れたり、ファーリスとガルベの二人の大守。  
770 ああ、キリスト教徒にはこよなくよき日、  
四方八方へとモーロ人達は逃れ散る！  
ミオ・シッドの軍勢、すぐさま追撃に移る。  
大守ファーリス、テレールに逃れ、難を避けんとせしが、

この地の人々大守ガルベをかくまおうとせず。

775 かくて彼、カラタユードへとひた駆けに駆け、おちのびんとす。

ミオ・シッド、更にこのモーロ人を追い、

この追走はカラタユードにまでも及びたり。

(40)

(ミナーヤ己の誓いが成就せしことを知る。戦利の品々多量にのぼる。エル・シッド、国王への贈物を整える)

ミナーヤ・アルバール・ファーニェスの手綱のもと、馬は縦横無尽に駆け、  
戦場のモーロ人を、三十四人も倒したり。

780 その太刀の鋭きこと、忽ち太刀持つ腕は朱に染まり、

肘をつたいて鮮血したたり落つ。

ミナーヤこの時、「われ存分に戦いたり。

今やカステーリアの地に赫々たる戦果伝わらん、

ミオ・シッド、ロイ・ディアス、モーロ人との会戦に大勝利を収めたりと」と叫ぶ。

785 多くのモーロ人、屍となって横たわり、生きて逃れたる者僅かもなし。

エル・シッドの手の者、モーロ人を追撃し、息つくまも与えず刀にかけし為なり。

今や、よき時に生を受けしエル・シッドの部下達、陣屋に帰り来たる。

ミオ・シッド、彼の名高き馬にまたがり、あたりを徘徊するに、

兜下をたぐり上げたれば、顔もあらわ、その顎ひげの見事なる様は！

790 兜頭布を背に垂らし、剣を手にするその英姿！

そのシッド、彼の部下の帰参する様を見やりつつ、

「天にましますわれらが神に感謝を捧げん、

かくの如く会戦に勝利を収めし今この時に。」という。

ミオ・シッドの手勢モーロ人の陣屋をほしいがままに奪いとり、

795 盾、武器、その他財宝ことごとく手中にす。

モーロ人より奪い取りたる馬、一ヶ所に集めたれば、

796 b 駿馬五百十頭を数えたり。

これらキリスト教徒の間に歓喜の叫び大きく響く。

キリスト教徒の戦に倒れしは僅か十五人のみ。

獲得せし金銀の山なす財宝、おさめる場もなし。

800 かくてキリスト教徒皆大いに豊かとなれり。

これ彼らの腕、刀によりて獲得したる戦利品の故なり。

先に城外に追いしモーロ人を再び城内につれ戻し、

ミオ・シッドあまつさえ彼等にいくばくかを与えよと命じたり。

ミオ・シッド、部下の兵士ともども大なる勝利を喜び味わう。

かくして戦果の金貨、他の山なす財宝の分配を命じたるが、

805 エル・シッドの取るべき五分の一の戦利品の内には、馬百頭もあり。

神よ、御身の加護のもと、エル・シッドその家来の者みなに、

徒歩の兵をも、騎馬の兵をも、如何に歓喜させたることよ！

よき時に生を享けしシッドの采配の何と巧みなることよ。

エル・シッドに伺候せし者皆ただ満足するばかり。

810 エル・シッドいう。「わが右腕ともたのむミナヤ、わが心の内を聞け！

神がわれらに与えられしこの財宝の内

思うがまま、好むがままに汝の手で取るべし。

われらが収めしこの大勝利の報せともども、

われ、汝をカスティーリアに派遣せん。

815 われに激怒せし国王、アルフォンソ王の許に

馬三十頭を献納物として捧げん。

それら馬には残らず鞍を置き、馬勒をつけたるうえに、

それぞれの鞍枠には剣を下げたる三十頭の名馬を。」

ミナーヤ・アルバール・ファーニェス答えていう。「喜びてその務め果さん。」

(41)

(エル・シッド、ブルゴスの大聖堂への寄進の約束をも果す)

820 「さて、ここに黄金と銀とあり、

その量たるや、この大袋を一杯にし、立錫の余地もなし。

ブルゴスの聖マリア大聖堂<sup>29)</sup>に千度のミサの寄進せよ。

その後に残りし金子は、わが妻と娘二人とに与えられよ。

わがため、夜も昼をも分かつ祈りを捧げよと伝えよ。

もしわれになお長き命あらば、妻も娘二人も御台所ともならん。」とシッドいう。

(42)

(ミナヤ、カスティーリアに向け出立す)

ミナーヤ・アルバール・ファーニェス、エル・シッドの言を聞いて喜び、  
826 b 彼と行を共にすべき者ども指名す。  
馬に糧を与えし折、夜もとつぷりと暮れ、  
ミオ・シッド、ルイ・ディアス、行く者どもを集め語らいていう。

(43)

(行く者への別れ)

「ミナーヤよ、汝出立せんか、かのなつかしきカスティーリアに向けて？  
830 われらが知己に洩れなく伝えよ、  
一神のご加護を得て、われらモーロ人との会戦に勝利を収めたり。一と。  
汝、帰ってきたらば、この地にてあいまみえんこともあらん。  
されどもし適わずば、われらがありとおぼしき所まで、追いかたれ。  
刀と槍もて、われらが身を守りてん。  
835 この刀と槍なくば、かかる狭隘の地に生命も守りあえず。  
またこの刀と槍との故に、この地を捨つこともあらんやと、憂うなり。」

(44)

(エル・シッド、モーロ人にアルコセールの城を売り渡す)

ミナーヤ準備もとのえ、暁と共に発ち、エル・シッド部下と共にこの地に留まる。  
この地不毛なるうえに、邪なることごと横溢す。  
来る日も来る日も、モーロ人近くにありてミオ・シッドを窺いたり。  
840 国境のモーロ人はおろか、はるか遠くの地の者までが。  
大守ファーリスの傷もいえ、モーロ人は大守を囲み策謀す。  
アテカ村の者、テレール村の者ども、なお富める町カラタユードの住民はこぞりて、  
エル・シッドと交渉し、書面にて和議をまとめたり。  
845 かくて、エル・シッド、銀三千マルコにてアルコセールをモーロ人に譲渡したるなり。

(45)

(アルコセールの売り渡し) [繰り返し]

ミオ・シッド、ルイ・ディアス、アルコセールを売り渡す。

彼の膝下の者たち、これによりて、何と多大の分配金を得たることか！

騎士にも、徒歩の兵にも、ことごとく家来に多大の賞賜を与えたるエル・シッド、  
その陣中に貧しき者唯一人も見ず。

850 よき主に仕えたる者、常に歎びの内にあること<sup>30)</sup>、これ自明の理なり。

(46)

(アルコセールの引き渡し。吉兆現わる。エル・シッド、モンレアル近くのエル・ポーヨに  
陣屋をおく。)

ミオ・シッド、アルコセールの城を今まさに出でんとせし時、

モロー人男女を問わず、悲しみの嘆声を上げたり。

「われらがシッド様、今こそ行かるるか、御身の行く手にわれらの祈念のとどかん こと  
を！

あなたの優しき処置にわれら一同の感謝の念深し。」

855 ビバールの騎士ミオ・シッドがアルコセールの城を離れし時、

モロー人、男も女もこぞりてただ涙を流すばかりなり。

その旗印を高く揚げ、勇者シッドは去り行く。

ハローン河を下流へと、馬を駆り進み行き、

このハローン河を離れし時、鳥が一群飛び来り、吉兆を告げたり。

860 エル・シッドの出立に、テレールの者は喜び、カラタユードの住民はなお歓喜するも、

エル・シッドの慈悲の数々を受けし、アルコセールの人々は、深く悲しめり。

エル・シッド馬に鞭打ち、なおその歩みを続け、

モンレアル近くの岩山に至る<sup>31)</sup>。

この地、峻高雄大にして、眺望絶佳の高みなれば、

865 四方いづれからも奇襲を受くる恐れなし。

エル・シッドまず手初めに、ダローカ<sup>32)</sup>の町に貢物を供させ、

反対側のモリーナをも手中にす。

次いでは、なおその彼方の地、テルエールにも威を及ぼし、

湧水の地セールファまでをもその手中にしたり。



(ミナーヤ、アルフォンソ王の居所に着く。王ミナーヤを赦免するも、エル・シッドをば赦さず)

- 870 神のみ恵み、ミオ・シッド、ルイ・ディアスに大ならんことを！  
 アルバール・ファーニェス、カスティーリアに行きて、  
 駿馬三十頭をアルフォンソ王に献上せんとす。  
 王その献納物に目をやり、満悦のほほえみを洩らしていう。  
 「かかる駿馬を予に献じたる者は誰か！ 神の加護を受けしミナーヤよ？」
- 875 「よき時に佩帶せしミオ・シッド、ルイ・ディアスなり。  
 彼エル・シッド、君の逆鱗にふれし後、アルコセールを策略をもって攻め落したり。  
 この報せバレンシアの王の許にもとどき、  
 バレンシアの王はアルコセールにエル・シッドを包囲し、その町の水を断ちたり。  
 ここでエル・シッドその城を出で、野にモーロ人と相対し、  
 この会戦でモーロの二大守を打ち負かしぬ。  
 陛下に奏す、エル・シッドの戦勝の品、数え切れぬ程に多く、彼、  
 誉れ高き国王たる君にこの献物を捧げ送ることを。  
 エル・シッドが御身の御膝下にひれ伏し、御手に口づけして願う。
- 880 神の御名にかけて主君としての恩恵を彼にたれ給わんことを。」  
 国王答う。「いまだその時にあらず、  
 主君の不興をこうむりし者、主君の恩恵を得られぬ者を、  
 三週間が程にて再び迎え入ることかなわず。  
 しかるに、この献物はモーロ人のものなりし故、予は受け取らん。
- 885 かかる戦勝の品を手をせしミオ・シッドのこと欣快この上もなし。  
 されどミナーヤよ、汝は許し、  
 汝には権利と封地<sup>33)</sup>とを復活させん。  
 わが領土に行くも出づるもよし、今からは汝に予の被護を与えんも、  
 勇者エル・シッドにつきては、今は何をか言わん。」

(アルフォンソ王、カスティーリアの騎士たちにエル・シッドの許に行くことを許す)

- 890 「なおそれに加え、汝アルバール・ファーニェスよ、汝に告ぐ。

わが国土をいでしミオ・シッドの許に駆せ参ぜんとする者あらば、

かかる出色の誉れ高き、勇敢なる騎士たちには、

その身の全きを保証し、又財産の没収は行なわず。」

ミナーヤ、アルフォンソ王の手に口づけし、かく言う。

895 「まことに忝き、有難きお言葉、われらの主君にて、天の与え給いし君に感謝せん。

かくなるお言葉、お許しを得たる今、いつの日か尚大なる恩恵をたれ賜うことを願うのみ。

神のご加護のもとに、君のご寛容を得んがため、われらも力を、誠を尽くさん。」

アルフォンソ王答う。「ミナーヤよ、もう言うまい。

汝、安んじてカスティーリアの地を行け、汝の行を阻む者われ許さじ。

何物に煩うことなく、汝ミオ・シッドが許に行け。」

(49)

(エル・ポヨからのエル・シッドの襲撃—ミナーヤ二百人のカスティーリアの騎士を伴ない、エル・シッドの許に帰る)

さて今はよき時に大刀を佩きしエル・シッドに話を移さん<sup>34)</sup>。

900 エル・シッドかの高みに陣屋を張る。

この高みこそはこの世の続く限り、

ミオ・シッドの腰掛岩としての名もて、永遠に記録にも留まらん。

この高みに陣を据えつつ、諸々の地を襲い行く。

マルティーン河の河畔全域を彼が手に収め、献物を貢せしめぬ。

905 このエル・シッドの猛威の報せサラゴース<sup>35)</sup>にまでも及び、

これモーロ人には疎ましきこと、大なる恥辱となれり。

この高みにミオ・シッドまる十五週も留まり居れるも、

エル・シッド、ミナーヤの帰還遅きを見てとり、

手勢の兵を引き連れ、夜の行軍を企て、

910 かの高みを後に、かの地を引き払いてゆく。

テルエールのはるか彼方をドン・ロドリーゴ通り行きて、

テバル<sup>36)</sup>の松林にルイ・ディアス陣を構えたり。

彼、この周辺の地域をことごとく襲い、奪いゆきて、

915 サラゴースまでも彼の貢物の地となしぬ。

三週間を経てかくなる熱しもて事を終えたる時、

カスティーリアよりミナーヤも帰り来る。ミナーヤと共に二百人、

ことごとく刀を佩きたる騎士も来たり。

加えて、皆様方、お知り召されい、徒歩の兵やその数も知れず。

920 ミオ・シッド、ミナーヤの勇姿が現わるるを見るや、

馬を急がせ、たちまちミナーヤに近ずき、固く彼をかき抱き、

その口に、目に口づけす<sup>38)</sup>。

ミナーヤあるがまますべてエル・シッドに語り、何ひとつ隠立てすることなし。

かの勇者エル・シッド凛々しく微笑み、かくいう。

「神に、徳高き聖者に感謝を捧げん。

925 ミナーヤよ、汝われと共にある限り、われ榮えんこと必条なり。」

(50)

(カスティーリアからの消息を知って、配流の兵士たち喜ぶ)

あゝ神よ、エル・シッドが禁衛の喜びあえる様は！

ミナーヤ・アルバール・ファーニェス、かかる吉報持ち帰りたるが故なり。

従兄弟の、兄弟のなつかしき報を一同に伝えたるが故なり、

一行が国に残せし妻や子の報をもたらせしが故なり。

(51)

(エル・シッドの歡喜) (対連)

930 あゝ神よ、美事たくわえしエル・シッド<sup>39)</sup>の喜びたる様は！

アルバール・ファーニェス千度のミサを寄進し、

エル・シッドの妻、その娘たちの報せを持ち帰りしが故なり！

あゝ神よ、エル・シッドが如何に喜び、如何に欣喜したることか！

「おゝ、アルバール・ファーニェスよ、汝の命の長からんことを！

我ら皆が一群となりても汝に及ばず、その任をかくも全く果せし汝には！」とエル・シッドいう。

(52)

(エル・シッド、アルカニェースの地を襲う)

935 かくてすぐさま、よき時に生を享けしエル・シッド、行を起こし、  
彼みずからが二百人の騎士を選び出し、夜を徹して馬を駆り、  
アルカニェース<sup>40)</sup>の地を荒廢の極みとせしうえに、  
その周辺の地にもその略奪の手を伸ばしゆく。  
かくて、出陣後三日目に元の陣屋に帰着す。

(53)

(モーロ人たちへのこらしめ)

その地域一帯に今やエル・シッドの激しき略奪のしらせ行き交い、  
940 モンソーン<sup>41)</sup>、ウェスカのモーロ人には悲しみ歎きの影深し。  
かたや、エル・シッドに献物を供すこと、サラゴースの民は喜びぬ、  
これ、エル・シッドなればこそ、いかなる無法無体をも恐るることなかるべし。

(Poema de Mio Cid, versos 506-942)

1974年 8 月

(註記)

1) 分配官 (quiñoneros) : 戦利品を分配するのを任とする者のことで、ここではただ単に現物を引渡すだけでなく、書面をつけ、受取りをも取った上で、戦利品 (quiñón) を分与したことをいう。

2) 五分の一分与・恩賞 (quinto) : 戦いの中で取得した戦利品の $\frac{1}{5}$ がその戦の指揮をとった侍大将に分け与えられるという慣例があった。ここでは、エル・シッドがその分与にあずかる権利を有する侍大将である。

3) 原文は「Moros en paz, ca escripta es la carta」となっている。歴史的には、エル・シッドの主君、Alfonso VI がその支配下に多くのモーロ人を帰順させたし、加えて、彼の勢力下にあるこれらモーロ人を攻撃するようなキリスト教徒騎士を処罰することもあった。したがって、エル・シッドは、Alfonso 王に従っていた Castejón のモーロ人を攻め、その主君と戦う結果になることを避けたといえる。原文の“carta”は“escritos los pactos con el rey Alfonso VI”の意味になる。

4) Alcarrias < ár. cária (=aldea) : 現在の Guadalajara 県の大部分を占めた一地方の名称。

5) Anquita (mod. Anguita) : Sigüenza の東、Tajuña 川畔の一地区。

6) Campo de Taranz : Tajuña 川と Jalón 川との中間にあり、両者を分岐させる台地の一部に当る地域。現在の Guadalajara 県と Soria 県との県境に位置する。

7) Fariza y Çetina (Ariza y Cetina) : Jalón 川畔の二集落。現在の Zaragoza 県にある。

8) Alfama : Jalón 川畔の一村落、上記 Çetina から 6 km. / La Foz (La Hoz) : 同じ Jalón 川畔の谷間にあった一村落であろう。今日ではこの村は存在しない。

9) Bovierca (Bubierca) : Jalón 川畔にあり、上記 Alfama から 5 km. のところにある村 / Ateca o Teca : 同じ Jalón 川畔にあり、Alfama から 11 km. にある村。

10) Alcoçer: 今日では消失してしまっている町だが, Jalón 川の左手, 即ち, Ateca と Calatayud との中間に位置したと想像される。

11) Terrer: 上記 Ateca (又は Teca) と同じく, 貢物を献じ, エル・シッドに恭順の意を表したアラビア人の町で, Jalón 川畔にある。両者の距離は 6 キロ程度とされる。現在の Zaragoza 県にある。

12) Caltauth (Calatayud): 上記の Terrer から 6 キロほど東の重要な都市のひとつ。

13) Salón 川: Jalón 川のこと, Ebro 河の支流のひとつ。

14) Per Vermúdoz: 配流の身のエル・シッドに同行した縁者の内, 最年少で, エル・シッドの旗手として仕えた人物である。特に記録によれば, Sancho II 及び Alfonso VI の宮廷に1069年から1085年の間仕候している。この叙事詩の中では, どもりで, 気短かな人物として, コミックに描かれている。

15) Siloca: Jalón 川の支流のひとつ。Jiloca 川のこと。

16) Tamín 王: Valencia のアラビア人王のうちで, Tamín と称する王は存在しなかったとされる。したがって, あくまでも仮空の人物であろう。あわせて, Calatayud は歴史的にも常に Zagagoza 王国の一部であったと考えられているので, この点の記述も歴史上の事実と合わない。

17) Segorve (Segorbe): 当時, Valencia と Teruel とを結ぶ交通の要所であった。かつて, “Vía Romana” と呼ばれたローマ時代の幹線道路のひとつで, 特に, Sagunto と Calatayud の二大都市を結ぶ名高い道路があったが, その中間に Segorbe が位置した。この “Vía Roman” を通って, モーロ人がエル・シッドを討たんとしたことがテキストの記述からも明らかになる。

18) Çelfa (Cella): Teruel から僅か 3 レグアの所に在った町で, かつてはこの地に水の豊富に湧き出る泉があり, 現在でもこの名を持つ川が近くを流れている。この様な理由から, Çelfa la de Canal (869) と呼ばれることもあった。

19) Fáriz と Galve: このアラビア人大守はまったく仮空の人物であろう。

20) 戦いに大鼓を用いるのは, それまでのキリスト教徒の騎士, 兵士達にはまったく未知のことであったとされている。

21) まったく同じ形が, versos 3615-17 にもある。戦いの開始を描写するのにこの叙事詩の詩人が好んで用いた形式である。

22) モーロ人はアラーの神の使者たるマホメットの名を大声でとなえ, 他方, キリスト教徒は, 戦いの守護神, 使徒サンティアゴの名を雄叫んだ。特に, “¡Dios ayuda y Santiago!” というとなえ文句があったと言われている。

23) Albar Fáñez: 事実 Çorita (Zorita) の領主であった。

24) Muño Gustioz: エル・シッドに育てられ, 長じては近習として仕えた実在の人物である。

25) Martín Muñoz: alguacil という官職の下に Montemayor を治めたことのある実在の人物である。

26) Albar Albaroz e Albar Salvadórez: いずれも実在の人物で, エル・シッドの家来として, その存在を証する文書が在ると言われる。

27) Galín Garciaz: 資料によりその存在が確認されているアラゴン王の家来の一人である。

28) Félez Muñoz: エル・シッドの甥であると共に, 家来としても, 後にエル・シッドの娘を助け出した人物である。その実在を証する資料は未だ知られていない。

29) Santa María de Burgos: アルフォンソ六世が1075年に建立した, ブルゴスの大聖堂のことで, 配流の旅におもむく途中, エル・シッドが千度のミサの寄進を約束したと関連させて述べたくだりである。(verso 225)。

30) テキストは《Qui a buen señor sirve, siempre bive en deliçio》であるが, その他, 《Quien a buen señor sirve, buen galardón alcanza [o ése vive en bienandanza]》など, 同じ内容の諺が古くからあったらしい。

31) テキストは《y ffincó en un poyo que es sobre Mont Real》である。現在でも Jalón 川畔で, Monreal del Campo から10キロのところに “El Poyo” という村が存在する。この村を見下すような位置に,

高い岩山があって、これが古くは “Poyo de Mio Cid” と呼ばれていたと言われる。

32) Daroca, Molina, Teruel, Çelfa : いずれも、当時の Zaragoza 回教王国のなかのアラビア人の町であった。現在では、夫々、Zaragoza, Aragón, Guadalajara, Teruel の諸県に属している。

33) honores e tierras : 国王がその家臣に扶持として与えた俸禄と土地のことをいう。この権利を認められた者は年貢の徴集、裁判の管理を行なうと共に、ある数の騎士をかかえ、年間3ヶ月は王に伺候し戦いに出なければならなかった。

34) 詩人、吟遊詩人が聴き手を意識し、一人称で語りかける代表的な形式である。

35) Martín 川 : Ebro 川の支流のひとつで、現在の Teruel 県を流れるもの。

36) Saragoça (Zaragoza) : この叙事詩には明らかにされていないが、エル・シッドは Zaragoza の回教王に仕え働いたとも言われている。

37) Tévar : 現在の Tarragona 県と Castejón 県との境界の一地点。

38) テキストでは《besóle la boca e los ojos de la cara》となっている。これは、互いに敬意を払い、尊敬しあっている人々の間では慣例として行なわれたあいさつであった。

39) la barba vellida : この叙事詩ではエル・シッドを意味するときのみ用いられた形式で、verso 274 にもまったく同一の形がある。

40) Alcañiz : Zaragoza 回教王国の一都市のことで、現在の Teruel 県にあった。

41) Monçon (Monzón) : Huosca (Huesca) の南東にあって、中世には大きな城の町として名高い場所であった。現在では Zaragoza 県に入っている。